

# 城下町の町づくりと現在の街づくり

3年5組3番 梅川 巴瑠

## 1. はじめに

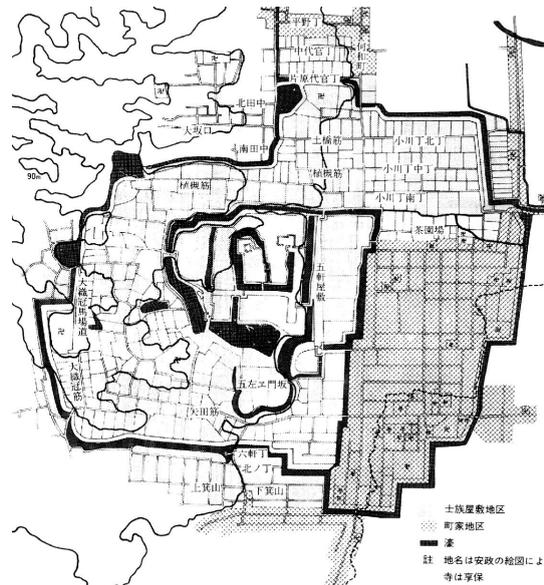
この城下町の町づくりと現在の街づくりというテーマにした理由は私は、日本の歴史が好きでその中で城下町についてを見ていたら興味を持ったから。それと現在の町への発展についても同時に調べたいと思ったから。まちづくりには歴史があると思う。昔の街の形式を受け継いで形成されている街もあると思って、色々な町があると思って、興味を持ち、それらを未来に伝えるべきことを考えることが大切だと思ったためこのテーマを選んだ。

## 2. 序論

城下町は、現在の町にどのような影響を及ぼしたのか。それと城下町のできた時代にその町の役割や、在り方が今の町に伝わって受け継がれているところがあると私は思う。それに城ごとで城下町が担った役割が変わってくると思うのでそれも明確にし示したいと考える。さらに町の発展にどのような影響があるのかも同時に調べて比較していきたい。まず、各城下町で共通する点を見つけ、その中で特に町の形成の重要視されているところを発見すれば、現在の町の形成への繋がりが見えてくると思う。そのために、城下町の構造や役割を明確に示し、また同じように、城下町を受け継いで町のあり方を調べていきたいと思ってる。それで私が考えたのは、実際訪れたことがある郡山城下町とstudy tourで訪れた熊本城下町についてを比較しながらその問題について考えていくことである。

## 3 本論

まず、郡山城下町や熊本城下町の先行研究を参考に土地の構造について資料を集め調査をおこなった。



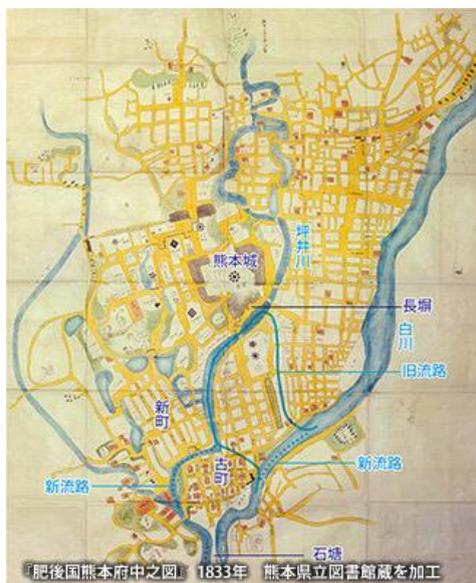
郡山城下町構造

(引用元 [http://www.jusoken.or.jp/pdf\\_paper/1980/7902-0.pdf](http://www.jusoken.or.jp/pdf_paper/1980/7902-0.pdf))

大和郡山城下町は奈良盆地北部に立地し、北から伸びている犬伏岡の最南部に、城下町の西半を成す士族屋敷が置かれている。この丘陵(あまり高くない山)は西縁(郡山城下町内の西側の端)が急斜面ないし崖になっているのに対し、東側は緩斜面(傾斜の緩やかな坂)となり、そこに刻まれたゆるい谷状の地形を利用した雨水や湧水による効果的な貯水池を多く持ち、そのいくつかは堀の一部として巧みに利用されている。すなわち、士族屋敷地区を区画する堀は、単に防御の目的だけではなく、東側の町家地区、更には農村集落と周辺農地に対する給水施設としての役割を果たしていたと考えられる。

現在に至る大和郡山の城下町の起源は、天正 13 年 9 月、豊臣秀長が郡山に入城したことに始まる。秀長は商工業保護の政策として同業者を町に集め営業上の独占権を認めたとうえで、町々にそれぞれの特許状を与えて保護したが、こうした外堀の内側にある地子免除の町である本町・魚塩町・堺町・柳町・今井町・綿町・藺町・奈良町・雑穀町・茶町・材木町・紺屋町・豆腐町の十三町は「箱本十三町」と呼ばれた。後に鍛冶屋町が加わるなど若干の変遷はあるものの、現在に至るまで「箱本十三町」の呼び名は残り、その風情、町並みは城下町を形成する重要な要素となっており、観光面においても本市の魅力の1つとなるものである。

熊本城下町について、長年研究してきた佐藤滋は、白川・坪井川の二本の河川を軸とした「馬の背状の台地」の地形の上に成立した「異形の城下町」と呼んでいる。次に、熊本城下町の構造は町割を形成する際に、直角を基本とする城下町のようには地理的に出来なかった。そのため、領主が城郭を移動したため町の中心地も移動した形の城下町が形成された。それゆえ佐藤は「熊本は全体を貫くはっきりとした骨格を持たず、ほかの城下町のような統合的な構造の説明をすることは難しい。あえていえば、城下町の東辺を区切る白川と、中心を流れる坪井川、そして熊本城の3つの要素が骨格を形づくるすべて」であり、「その大きな骨格に、それぞれ固有な構成の小規模な『まち』が割りつけられている」と述べている。最終的に、「方向感覚を狂わす空間装置が町全体に仕掛けられているかのような迷宮都市、それが城下町・熊本の全体像なのだ」ということを佐藤は明らかにした。



熊本城構造地図

次に、以下では郡山城下町と熊本城下町の町並みの比較をしていきたいと思う。

熊本城下町では古町や新町などの町が現代において発展してきたと言われている。古町は町人町として建設され、細工町、呉服町、鍛冶屋町、大工町など職名が記され、町名に由来する様々な商品を扱う店が並んだ。建設当時から物資流通の動脈である坪井川の舟運が利用されていたが、明治 24 年の九州鉄道開通、大正 13 年の市電開通により、ますます流通の拠点性

が高まった。大正14年に行われた国産協賛会を機に市街地整備によって、機能集積が進み、都心は市街地へと移った。昭和5年、紺屋町に八木デパートが開業するものの、昭和13年に閉店し、以後は問屋街としての性格が強まったとされている。その後は自動車交通の発達や郊外の流通業務団地開発に伴い既存企業が移転し、跡地にマンション建設が進むなどして、現在の町に至っている。

一方で、新町は、古町の次に建設されたとされ、熊本城から諸国へ通じる4つの街道の起点である「元標」を擁する熊本城の玄関口にあたる町である。明治10年の西南の役において、新町・古町は激戦地となり、町の多くが焼失した。西南の役後、古町では以前の町並みが建てられ、新町では県会議事所、警察、区役所、熊本郵便役所などの主要施設が建てられ、卸・小売業、料亭、通りには朝市などが立ち、熊本の中心として賑わいを見せるようになった。その後、昭和40年代に入ると市場が田崎へ移転するに伴って卸・小売業が減少し、加えて製造業・事務所も移転が目立つようになった。そして、マンションなどが建ち現在に至っている。

次に大和郡山城下町では、戦国時代から江戸時代に急速に発達し、以後現代でも広がりを持っている。しかもそこでは、先行条件として地形・水系、条里制・条坊制に基づく地割、基本的に中世に起源をもつと考えられる村の領域設定が存在する。また、それらに基づく近世城下町の地区のゾーニング・道路割や土居や水路網などの諸施設、町割と各町の境に設けられた木戸、そして地割とその上に展開する住居形式・集合形式に到るまで、さまざまなスケールにおける諸要素が、先行条件を巧みに利用することによって緊密に結びあわさされていて、都市の全体的構造は今日まで基本的によく保たれていると言われる。

ここからは、城郭の役割と現在の状況について考察していく。本丸の天守郭には、その当時は、軍事系の役割を果たしていた。それが、現在では、学校の敷地になったり、会館を中心に多目的の広場などが広がっている。二の丸には、武士の訓練の場や、食料の保管庫や、住宅などがあった。現在では、郡山高校の校舎や、グラウンド、体育館になっており発展している。堀は当時と現在の違いはあまりない。

郭名	城郭としての役割	現在の状況	
本丸	天守郭	天守台、櫓4基及び極楽橋門(白沢門)が多間櫓で連結	天守台は石垣を積み替え、展望台として活用、郭南側は柳沢神社敷地
	墨沙門郭	櫓2基を多間櫓で連結	郭の南側は柳沢文庫及び柳澤氏私邸、北側は柳沢文庫の庭園・茶室
	常盤郭	追手門及び追手東隅櫓を多間櫓で連結	城址会館を中心に、庭園と多目的広場として利用、西端は学校敷地(セミナーハウス)
	玄武郭	煙硝蔵5棟、防水池が設置	林地
二の丸	陣南郭	訓練場、武者ぞろえの場	広場系 私道、民家8軒(土地は柳沢文庫所有)
	殿郭	東西に概1棟づつ計2棟、馬術訓練場	軍事系 学校敷地(校舎・プール・グラウンド)、グラウンドは流域貯留浸透事業による遊水池
	縁郭	藩主世継ぎの館跡(新宅)	住居系 学校敷地(グラウンド)
	麒麟郭	西側の武者ぞろえの場、南側に藩主の御霊屋や稲荷社	広場系 学校敷地(校舎、体育館、グラウンド)
	薪蔵	薪等燃料庫	住居系 西公園(遊具・野外ステージ・トイレ)
	広小路	道路、広場	広場系 西公園の一部
	松蔵	米、食料の保管庫	
	二の丸屋形	藩主の居所、藩庁	住居系 学校敷地(校舎、体育館、プール)
	大腰掛	藩士の控えの場	
	菊畑	菜園	
堀	内堀	水堀	水堀
	五軒屋敷池	水堀	水堀
	左京堀	水堀	空堀
	鯉堀	水堀	遊水池兼公園(特定保水池整備事業)
	鷺堀	水堀	遊水池兼公園(特定保水池整備事業)
	松陰堀	水堀	水堀、北側は埋め立てられ学校敷地(校舎)
	蓮池	水堀	線路敷、駐車場、住宅、東側は三の丸緑地公園

表3-2 各郭の利用状況(緑色は既に公園的利用が行われている。赤色は公園拡張が予定される郭)

[https://www.city.yamatokoriyama.lg.jp/material/files/group/27/3josekikoen\\_kihon\\_honpen\\_190416.pdf](https://www.city.yamatokoriyama.lg.jp/material/files/group/27/3josekikoen_kihon_honpen_190416.pdf)(引用元)

#### 4. 結論

城下町のまちづくりと今のまちづくりはどちらの城下町も引き継いでいることがわかった。当時の情景が残っているところも多々あるのに対して、高校や公園などの現代的な建物に変わってしまったところもあった。次に、今後も城下町を保全する意義には、都市の文化的景観を守ることは、歴史に裏付けされた地域固有の様々な文化的資産を継承し、地域住民が都市の記憶を共有できる場所を維持し続けていくことにあるため、文化を継承することによりのちのちの魅力が高まり、多くの人々が集まり交流することによって、さらに新しい文化や生業の創造につながることを期待されるためであるから地域全体で保全活動を行うことが必要になってくる。

#### 5. おわりに

この調べ活動をしてみて、先人の知恵を未来に伝える大切さを学んだ。自分が未来に伝える意味を学んだ。文化を大切に考えながら生きていきたいと思う。など

#### 6. 参考文献・出典

[https://www.city.yamatokoriyama.lg.jp/material/files/group/27/3josekikoen\\_kihon\\_honpen\\_190416.pdf](https://www.city.yamatokoriyama.lg.jp/material/files/group/27/3josekikoen_kihon_honpen_190416.pdf)

[https://www.city.kumamoto.jp/common/UploadFileDsp.aspx?c\\_id=5&id=38017&sub\\_id=1&flid=272514](https://www.city.kumamoto.jp/common/UploadFileDsp.aspx?c_id=5&id=38017&sub_id=1&flid=272514)

[https://repository.nabunken.go.jp/dspace/bitstream/11177/2870/1/BB17772155\\_104107.pdf](https://repository.nabunken.go.jp/dspace/bitstream/11177/2870/1/BB17772155_104107.pdf)